

# Utopia と トマス・モア<sup>1)</sup>\*

鈴木 宜 則

## Utopia and Thomas More

Yoshinori SUZUKI

### I

前稿において筆者は、主として、Utopia を非キリスト教的な異教徒の理想国家と把握し、Utopia の戯作性を強調するサーツとレノルズの見解<sup>2)</sup>を批判し、Utopia がキリスト者モア自身の最善国家に近い国家像であること、および、Utopia が基本的に社会批評書であることを解明し、主にそこから抽出し得るモアの社会思想史的意義が彼の高慢心 *superbia* の評価にあることを明らかにした。しかし、その際、彼らの主張に対して逐一反駁を加えるに急な余り、筆者自身の立場から見て Utopia が非ヨーロッパ的・非キリスト教的な社会であることを示しているかにみえる事項に対して、充分検討を加える余裕はなかった。また、Utopia の全体としての性格規定についても、通常理想国家と呼ばれているもの<sup>3)</sup>を現実性を基準にして《理想国家》と《最善国家》とに分類し、両者の中間形態であることを明らかにするに留まった。

そこで、本稿においては、先稿で論じ残した、Utopia に含まれている非ヨーロッパ的・非キリスト教的に見える諸事項を検討し、しかる後に、Utopia のより厳密な性格規定を試みたいと思う。

ちなみに、*utopia* 概念に極めて多種多様な意味が付与されている今日、その創設者であるモアの Utopia に立ち返り、その基本的な個性を解明する作業は、*utopia* を定義する場合に不可欠の前提となるはずである。

### II

前稿では全くないし不十分にしか検討しなかった事柄で、Utopia がヨーロッパ的・キリスト教

\* 1975年10月31日 受理

- 1) 本稿は、前稿「最善国家としてのウートピア——トマス・モアの社会思想史的意義解明のために——」研究年報『経済学』第35巻第1号、東北大学経済学会、1973年、75-91頁)の趣旨を補足するものである。なお、以下「拙稿」として引用するものは、すべて本論文である。
- 2) レノルズは、後続書においても同様な解釈を繰り返している (E. E. Reynolds, *The Field is Won: The Life and Death of Saint Thomas More*, London, 1968, p. 106)。
- 3) 例えば、最近のある *utopia* 思想研究者も、モアの Utopia を無造作に理想国家 (ideal commonwealth) と呼んでいる (E. Hansot, *Perfection and Progress: Two Modes of Utopian Thought*, Cambridge, Massachusetts, and London, 1974, p. 64)。

的な社会であることを疑わせ、*Utopia* の戯作性を補強するかに見える事項の中で注目すべきものは、次の諸点である。

まず、(1)として、モア自身が執筆した部分について見ると、① *Utopia* では太陰暦が採用されていること<sup>4)</sup>。②公的な礼拝式の最初と最後に、会衆が地面に平伏すること<sup>5)</sup>。③死者は、原則として火葬または埋葬に付されること<sup>6)</sup>。④ *Utopia* にはヨーロッパの哲学者の名前が知られていないにもかかわらず、論理学の分野においてヨーロッパの「近代論理学者」には到底及びもつかない点を唯一の例外として、*Utopia* 人が諸学芸のほとんどあらゆる分野でヨーロッパの先哲と同格であること<sup>7)</sup>。⑤ *Utopia* 人のギリシア語に対する強い関心とその迅速な修得、および、ヒュトロダエウスが、携行したギリシア語の書物を彼らに手渡してきたこと<sup>8)</sup>。⑥ヒュトロダエウスらが、*Utopia* 人が印刷術と製紙術を発明する切っ掛けを作ったこと<sup>9)</sup>。⑦ヨーロッパのキリスト教信仰が支配的な地方では同盟が神聖かつ不可侵であるのに対して、*Utopia* の位置する新世界では、同盟が遵守されないばかりかそもそもそれを締結する習慣自体が悪であると解されているために、*Utopia* 人は同盟を結ばないこと<sup>10)</sup>。⑧ *Utopia* 人の相当数が、キリスト教に積極的に改宗したこと<sup>11)</sup>。⑨ *Utopia* 人が使用する楽器の多くは、ヨーロッパのものと形が異なるものであるが、はるかに音色がよく、また、彼らの音楽が、自然の感情の動きに対応し、音と内容とが合致している点でヨーロッパの音楽よりはるかに優れていること<sup>12)</sup>。⑩ヨーロッパ人は、*Utopia* 人に才能の点では勝っているとしても、熱心と勤勉という点でははるかに劣っていること<sup>13)</sup>。

これらの事項は、いずれも *Utopia* の事情の報告者であるヒュトロダエウスによって伝えられたことであるが、同様な事柄は、*Utopia* の理解には無視できない、ヒレスによってその本文中に付けられた見出しと、同書に収録された詩や書簡の中にも散見される。

(2)として、前者に関するものは、次の七箇所である。①「ああ聖なる社会よ、キリスト教徒の做らすべき社会よ」<sup>14)</sup>。②「*Utopia* 人たちはふつうのキリスト教徒たちよりどれほど賢いことか」<sup>15)</sup>。

4) *Utopia*, ed. E. Surtz and J. H. Hexter, *The Yale Edition of the Complete Works of St. Thomas More*, Vol. 4, New Haven and London, 1965, pp. 230-31. 沢田昭夫訳「ユートピア」『エラスムス、トマス・モア』、世界の名著17、中央公論社、昭和44年、478-79頁。以下、それぞれ“*Utopia*”および「沢田訳」と略記する。

ちなみに、先稿で太陰暦とすべきところを太陽暦と誤記した(『ユートウピア』解明のための一試論——トマス・モアにおける正義の観念——)『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学篇第23巻、昭和47年、47頁)ので、ここで訂正しておきたい。

5) *Ibid.*, pp. 234-35, 236-37. 沢田訳, 481, 483頁。  
 6) *Ibid.*, pp. 186-87, 222-23. 同上, 448-49, 473頁。  
 7) *Ibid.*, pp. 158-59. 同上, 429-30頁。  
 8) *Ibid.*, pp. 180-81. 同上, 443-45頁。  
 9) *Ibid.*, pp. 182-83. 同上, 446頁。  
 10) *Ibid.*, pp. 196-99. 同上, 455-57頁。  
 11) *Ibid.*, pp. 216-19. 同上, 469頁。  
 12) *Ibid.*, pp. 234-37. 同上, 482頁。  
 13) *Ibid.*, pp. 106-7. 同上, 397-98頁。  
 14) *Ibid.*, pp. 146-47. 同上, 422頁。  
 15) *Ibid.*, pp. 156-57. 同上, 423頁。

③「しかし占星学者は今日キリスト教徒のあいだで支配的な地位にある」<sup>16)</sup>。④「魂の不滅、これについて今日かなり多くの人、キリスト教徒さえも疑いをもっている」<sup>17)</sup>。⑤「だが、われわれのほうにはなんとという大群をなしていることか」<sup>18)</sup>（聖職者のこと）。⑥「われわれの聖職者たちよりはるかに聖なる聖職者たちよ」<sup>19)</sup>。⑦「しかるに、われわれのところでは最もけがれたものが祭壇に最も近いところにはべろうとしている」<sup>20)</sup>。

次に、(3)として、後者については以下の三点を挙げることができよう。①ジャン・ド・パリュッドが、ヒレス宛の書簡の中で、ちょうど Utopia 人がキリスト教を受け入れ始めたように、ヨーロッパ人も彼らから社会統治方法を借用するようになればよい、と述べている点<sup>21)</sup>。②コルネーリス・デ・シュライファーが、読者のために書いた詩の中で、Utopia には新世界に見られる新奇なものと、ヨーロッパとは異なる生活様式も盛り込まれていることをうたっている点<sup>22)</sup>。③トマス・ラブセットに宛てた書簡の中で、ギヨーム・ビュデが、Utopia をヒュトロダエウスが伝えモアがまとめた新世界の島であるとしている点<sup>23)</sup>。

以上列挙した事柄自体は、すべて Utopia の社会ないし Utopia 人がヨーロッパ社会ないしヨーロッパ人とは異なるものであることを示している。しかし、それらが非ヨーロッパ的・非キリスト教的であるかという点、事情は必ずしも単純ではない。問題は、それらが使われた意図と文脈である。以下、順を追って逐一検討したい。

まず、(1)に関して。②は、単なる異なった風習の記述と解されるが、③には、ヨーロッパに対する諷刺の意味も含まれているように思われる<sup>24)</sup>。また、①、④、⑤、⑥は、⑩のヨーロッパ人が才能の点で Utopia 人に優越しているという一般的評価の具体例になっている。しかし、④の記述は、ヒレスも「この箇所は冗談らしい」という見出しを付けたように、その前後関係から判断して、実在とかけ離れた煩瑣な空理空論を弄する近代の論理学者を諷刺するための冗談であることを見逃がしてはならないであろう。それを裏付けるかのように、ギリシア語や印刷術・製紙術の場合と異なり、Utopia 人が「近代の論理学」を受け入れたという記述は、どこにも見当たらないのである。要するに、その真意は、卓越した才能も適切な使用を誤ると結局は無に帰してしまうのであり、それを正しく生かすための熱意と勤勉こそが肝要であることを示唆することにあるものと解さ

16) *Utopia*, pp. 160-61. 沢田訳, 430 頁。

17) *Ibid.*, pp. 162-63. 同上, 431 頁。

18) *Ibid.*, pp. 228-29. 同上, 478 頁。

19) *Ibid.*, pp. 230-31. 同上, 478 頁。

20) *Ibid.*, pp. 232-33. 同上, 480 頁。

21) *Ibid.*, pp. 26-27. 同上, 510 頁。

22) *Ibid.*, pp. 30-31. 同上, 491-92 頁。

23) *Ibid.*, pp. 12-15. 同上, 504-6 頁。

24) ③で、希望に満ちて死んでゆくものが火葬に、逆に臨終の際に苦悶する者は土葬に付されると述べられているのは、当時のキリスト者に相応しくないヨーロッパ人に対する諷刺の意味も持つ。なお、②を書いたモアの脳裡には、ひょっとすると、イスラム教徒の姿が浮かんだのかもしれない。

れる。⑤の叙述の見出しに、ヒレスが「しかし今日、脳なし、木偶の坊が学問に専心し最も恵まれた才能は快樂で台なしになっている」という言葉を付して、学問的才能に恵まれた者こそが、その本来の使命でありそこにこそ真の快樂が存在する真理の探究に従事すべきであり<sup>25)</sup>、その場合、才能そのものよりもそれを正しく活用するための態度を確立することこそが肝腎であることを暗暗裡に指摘していることは、このことを裏付けている。さらに、ギリシア語に対する熱烈な関心は、上記のこの具体例であり、ヒューマニストモアの態度の反映であると解されるが、反面、当時依然として根強かったギリシア語への偏見や無関心に対する諷刺も含まれているものと思われる。

いずれにせよ、これらの諸点は、Utopia 人の基本的な思想や制度とは無関係の比較的些細な事柄であり、Utopia の説明の中で重要な意味を持たないものであることを指摘しておきたい。

これに対して、⑦と⑨は、Utopia 人の方が優越している場合である。たしかに⑦は、ヨーロッパの君主や教皇に対する反語と諷刺であるが、他面、そこには、人間本来の善意によって諸民族は自然本来の共同体に属するものであり、それが同盟という人為的なものに代わるものなのだという立場が主張されている。この点は、人間自然の感情を重視する⑨に通じ、したがって、両者とも「単純なれ」というキリストの福音につながるものであり、その意味で④にも関係している<sup>26)</sup>。

さらに、⑧は、一見キリスト教の Utopia の宗教に対する優越性を示しているかにみえる。しかし、改宗の理由とその表現の仕方が問題である。その間の事情は、次のように述べられている。「われわれの口からキリストの名、教え、生きかた、奇跡について聞き知り、またみずから進んで流した血によってキリストの教えを多くの民族に広く伝えた殉教者たちの感嘆すべき節操についても聞き知って以来、彼らも積極的にキリストの教えに同感の意を表わすようになりました。それはちょっと信じられないほど積極的だったのです。これは、神様が彼らを内的に照らしたもうたためか、それともキリストの教えが彼らのあいだで最も支配的な教えに一番近いと、彼らの目に映ったためでしょうか。それに劣らず重要な契機だったと私が信じたいのは、キリストは弟子たちの共同生活をよしとしたもうた、そういう生活は今日までもキリスト教徒たちのほんものの共同体のなかで実行されているそうだ、こういう話を彼らが聞いたことです。どういうことが契機であったにせよ、相当数のものがわれわれの宗教にはいり洗礼を受けました」<sup>27)</sup>。

このように、モアは、理由を断定することを避けている。しかし、Utopia では、世界創造と摂理の原因である唯一最高の存在と靈魂の不滅、および死後の賞罰を承認することが信仰の条件になっているのであるから、キリスト教と Utopia で最も支配的な教え——能動力によって全世界に遍在し、万物の発生や変化を支配する超理性的な唯一の存在を信じ、この神を父と呼ぶもの<sup>28)</sup>——

25) *Utopia*, pp. 130-33, 172-73. 沢田訳, 412, 439 頁。

26) ビュデも、*Utopia* に収録された書簡の中で、主として市民法と教会法に関してではあるが、同様な立場からヨーロッパを批判し、Utopia の法制を称讃している (*Utopia*, pp. 4-9. 沢田訳, 499-502 頁)。

27) *Utopia*, pp. 216-19. 沢田訳, 469 頁。

28) *Ibid.*, pp. 216-17. 同上, 468 頁。

との同質性、ならびに、規模の違いはあれ共同生活の共通性がその理由だったことは、想像に難くない。上記の引用文の後で、「キリストの教えに同意しない人々でも、その教えを認めることを妨げたりはせず、改宗者を攻撃することもしません」<sup>29)</sup>、と述べていることは、少なくとも前者の判断を裏付ける。しかも、この引用箇所からも推測できるように、Utopia では、信仰活動は理性的になされなければならない<sup>30)</sup> ほか、いかなる宗派も、公的な礼拝式においては独自の行動をとることが禁じられているのである<sup>31)</sup>。したがって、少なくともその限りにおいて、Utopia で中心的な宗教とキリスト教とが優劣関係にあるわけではない。

してみれば、「Utopia 人たちは、あのいろいろの迷信的考えから脱却し、理性的に見てほかの宗教にまざっていると思われる唯一の宗教に合一しつつあります」<sup>32)</sup> と判断される時、大部分のより賢明な人々が、惑星や過去の偉人の崇拜を否定し、Utopia で最も支配的な一神論を支持している<sup>33)</sup> ことに照らして、この統合されつつある唯一の宗教とは、キリストの教えと同質的な Utopia の中心的宗教であると解される。そして、六人のヨーロッパ人が Utopia に到着してから起こった変化が、Utopia 人によるギリシア語と印刷術・製紙術の修得に加えて、キリスト教の受容だけであることは、この判断を補強するものである。

なお、この場合、キリスト教とは、先の二つの引用箇所から明らかなように、当時のローマ教皇を中心とするカトリック教ではなく、基本的にキリスト教の原点であるキリスト自身の教えであることに注意を喚起しておきたい。

次に、(2)についてであるが、星占いという迷信に対する批判である③を除き、いずれもキリスト教徒から成るヨーロッパ社会の宗教的、道徳的批判——あるいはキリスト教徒一般に対する、あるいは聖職者に対する——と、Utopia 人ないし Utopia 社会の宗教的、道徳的礼讃である。この場合、評価の基準となるものがキリスト教本来の精神、すなわちキリスト自身の教えであることは、言うまでもない。私有財産制のヨーロッパと異なり、共有財産制を採用している Utopia の諸制度を擁護した後で、ヒュトロダエウスによって次のように主張される時、それは、この間の事情を如実に物語っていると言わなければならない。「人間の生活風習の歪みのために風変わりだと目にうつるものをみな新奇でばかげたものだともみなして捨てるべきだというなら、キリストの教えたもうたことの大部分を、私たちはキリスト者たちのあいだでそっと隠しておかなければなりません。……というのも、キリストの教えの大部分と、現代の生活風習とは、私の話がかけ離れていたよりもはるかに遠くかけ離れているからです」<sup>34)</sup>。

最後に、(3)について。①の書簡には、確かに Utopia がキリスト教的であることを明示するような言葉は見出せない。しかし、Utopia には社会の改革に役立つあらゆるものが認められると指摘

29) *Utopia*, pp. 218-19. 沢田訳, 470 頁。

30) *Ibid.*, pp. 218-21. 同上, 470 頁。

31) *Ibid.*, pp. 232-33. 同上, 479-80 頁。

32), 33) *Ibid.*, pp. 216-17. 同上, 468 頁。

34) *Ibid.*, pp. 100-1. 同上, 393 頁。

され<sup>35)</sup>、さらには、1518年版からは削除されたものの、1516年と17年版に収録された同じ作者の手に成る詩<sup>36)</sup>において、Utopia が信心をも含む万徳を実現しているとうたわれていることは、それにもかかわらず、Utopia のキリスト教性を暗示している。②の詩では、Utopia によって万徳の源泉と諸悪の起源、この世の万象の空しさを知ることができると述べて<sup>37)</sup> 間接的に、また、③の書簡においては、明言する<sup>38)</sup> ことによって直接的に、Utopia がキリスト教的であることが示されている。

ところで、こうした内在認識と同様に重要なことは、モアが、エラスムスに対して、学者や政治家による Utopia の推薦状を提供してくれるように依頼した、という事実である<sup>39)</sup>。してみれば、彼らは、Utopia のよき理解者であるだけでなく、その著者モアと言わば共犯関係にあったということになる。

以上の分析から、次のことが明らかになる。第一に、Utopia には、極めて複雑かつ巧妙な修辭的手法が採用されていること<sup>40)</sup>。第二に、Utopia は、諷刺的な社会批評書であること。第三に、Utopia が、基本的にキリスト教的な社会であること。それを疑わせるような諸要素は、ほとんど枝葉末節の事柄だけであり、その歴史的事実を読者に印象づけるための手段にすぎない<sup>41)</sup>。第四に、Utopia 人ないし Utopia の社会が、ヨーロッパ人ないしヨーロッパ社会に比して、宗教的、道徳的、したがって人間的に優れていること<sup>42)</sup>。

35) *Utopia*, pp. 26-27. 沢田訳, 510 頁。

36) *Ibid.*, pp. 28-29. 同上, 489-90 頁。

37) *Ibid.*, pp. 30-31. 同上, 491-92 頁。

38) *Ibid.*, pp. 10-11. 同上, 502 頁。

39) E. Surtz, *Utopia*, Introduction, p. clxxxiii.

40) ヒューマニストの修辭法やその思想史的背景については、*Translations of Lucian*, ed. C. R. Thompson, *The Yale Edition of the Complete Works of St. Thomas More*, Vol. 3, part I, New Haven and London, 1974, Introduction, pp. xvii-lv 参照。

41) ただ、Utopia の第一巻で神が殺人も自殺も禁止した (*Utopia*, pp. 72-73. 沢田訳, 372 頁) と述べられているのに対し、第二巻においては、幾つかの条件付で安楽死と自殺が認められている (*Ibid.*, pp. 186-87. 同上, 448-49 頁) 点が問題になる。これも同様に解釈し得る余地があるが、第一に、その条件の厳格さ(不治の病気で耐え難い苦痛を伴うものにつき、神意の解釈者である聖職者と長老会議の勧告があった場合に限る)と、第二に、勧告を拒否した者への入念な配慮、第三に、主として悪疫が考慮されている(当時ヨーロッパにペストが蔓延したことに留意せよ)ことに照らして、特に具体的な根拠が示されない限り、モアの真意と解するのが妥当であろう (Cf. E. Surtz, *The Praise of Wisdom: A Commentary on the Religious and Moral Problems and Backgrounds of St. Thomas More's Utopia*, Chicago, 1957, pp. 79-93)。

また、逆に、述べられなかったことも重要である。例えば、ヒューマニストが人間らしい生き方の日常具体的な表現に関心を持っていた(沢田昭夫「エラスムスの『モア伝』について」(一)『アカデミア』第76集、南山学会、1970年、85頁)とすれば、Utopia 人の外見についてほとんど触れられていない (*Utopia*, pp. 178-79. 沢田訳, 443 頁) のは、不思議である。このことは、モアがヨーロッパ人と同様な人種を考えていたのではないかと思わせる。

42) *Utopia* の中で Utopia 人に対して批判的な叙述がなされているのは、彼らが配偶者を選択する際の習慣 (*Utopia*, pp. 186-89. 沢田訳, 449-50 頁) についてだけである。

